

関係各位

京都府病虫害防除所長
(公 印 省 略)

病虫害発生予察情報について

下記のとおり発表しましたので送付します。

病虫害発生予報第 8 号 (1 0 月)

予報の概要

作物名	病 害 虫 名	予 想 発 生 量 〈平年比(前年比)〉
イネ	トビイロウンカ	並
黒大豆・ アズキ	ハスモンヨトウ ハダニ類 黒大豆 吸実性カメムシ類	並 黒大豆 <u>やや多</u> アズキ 並 <u>多</u>
チャ	チャノコカクモンハマキ チャノホソガ カンザワハダニ	山城 <u>やや多</u> (やや多) 丹波 <u>やや多</u> (やや多) 丹後 並 (少) 山城 <u>やや多</u> (多) 丹波 並 (やや多) 丹後 並 (並) 山城 <u>やや多</u> (やや多) 丹波 <u>やや多</u> (多) 丹後 並 (並)
野菜	アブラナ科野菜 ベと病 アブラナ科野菜 白斑病 キャベツ 菌核病 アブラナ科野菜 黒腐病・黒斑細菌病 アブラナ科野菜 コナガ 野菜類全般 ハスモンヨトウ ホウレンソウ シロオビノメイガ ネギ ネギハモグリバエ 野菜類全般 ハモグリバエ類 ネギ ネギアザミウマ 野菜類全般 シロイチモジヨトウ 野菜類全般 タバコガ類 アブラナ科野菜 ハイマダラノメイガ	<u>やや多</u> (多) 並 (並) 並 (並) <u>やや多</u> (並) やや少 (少) <u>やや多</u> (並) <u>やや多</u> (並) 並 (やや多) 並 (やや多) <u>多</u> (やや多) <u>多</u> (並) 並 <u>多</u> (多)

※平年とは過去 10 年の平均である。

目 次

予報の概要	1
予報本文	2
今後注意すべきその他 の病虫害等	8
参考	
Ⅰ 近畿地方の気象の 1 か月予報	11
Ⅱ 用語の定義	11

農作物病虫害情報サー
ビスホームページ
<https://www.pref.kyoto.jp/byogai/>



病虫害予察情報等メール
サービス
<https://www.pref.kyoto.jp/bojoshou/mailservice/mailservice.html>



予報本文

イネ

1 晩生水稲 トビイロウンカ (京都府奨励の晩生品種：ヒノヒカリ)

予報内容 発生量：平年並

予報の根拠

- (1) 9月中旬現在、巡回調査では発生を認めていない(平年並)。
- (2) 向こう1か月の気温は平年比高い(+)と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 多発すると坪枯れ等の被害を起こす。
- (2) 9～10月の気温が高いと増殖に好適である。
- (3) 低湿田、通風不良田、多肥田等では発生しやすいので注意する。

黒大豆・アズキ

1 ハスモンヨトウ

予報内容 発生量：平年並

予報の根拠

- (1) 9月中旬現在、発生量は黒大豆で平年比やや多く(+)、アズキで平年並。
- (2) 9月第2半旬現在、フェロモントラップへの誘殺数は京田辺市で平年比少なく(－)、亀岡市及び京丹後市で平年比やや少ない(－)。
- (3) 向こう1か月の気温は平年比高く(+)、降水量は平年並か少なく、日照時間は平年並か多いと予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 齢が進んだ幼虫は周囲に分散し、かつ、薬剤の効果が著しく低下するので、若齢幼虫期の防除が重要である。

2 ハダニ類

予報内容 発生量：黒大豆 平年比やや多い
発生量：アズキ 平年並

予報の根拠

- (1) 9月中旬現在、発生量は黒大豆で平年並、アズキで平年比やや少ない(－)。
- (2) 向こう1か月の気温は平年比高く(+)、降水量は平年並か少なく、日照時間は平年並か多いと予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 晴天で高温乾燥が続くと多発しやすくなる。
- (2) 増殖が速く、高密度になってからでは防除効果が劣るので、初期防除に努める。
- (3) 合成ピレスロイド系薬剤を連用すると、ハダニ類が多発する場合があるので注意する。

3 黒大豆 吸実性カメムシ類

予報内容 発生量：平年比多い

予報の根拠

- (1) 9月中旬現在、発生量は平年比多い(+)。
- (2) 9月第2半旬現在、予察灯(60W)への誘殺数は、アオクサカメムシは京田辺市及び亀岡市で誘殺を認めず(平年並)、京丹後市で平年比多い(+)。イチモンジカメムシは京田辺市で誘殺を認めず(平年並)、亀岡市で平年並、京丹後市で平年比多い(+)。ミナミアオカメムシは京田辺市で平年並、亀岡市で平年並、京丹後市で平年比多い(+)。
- (3) 9月第2半旬現在、予察灯(BL)への誘殺数は、イチモンジカメムシは京田辺市及び京丹後市で誘殺を認めず(平年比やや少ない(－))、亀岡市で平年比やや少

- ない（－）。ミナミアオカメムシは京田辺市で平年並、亀岡市で平年比やや多く（＋）、京丹後市で誘殺を認めていない（例年並）。
- （４）９月第２半旬現在、イチモンジカメムシのフェロモントラップへの誘殺数は亀岡市で例年比やや少ない（－）。
- （５）９月第２半旬現在、ホソヘリカメムシのフェロモントラップへの誘殺数は京田辺市で例年比やや多く（＋）、亀岡市で平年並、京丹後市で例年比多い（＋）。
- （６）向こう１か月の気温は平年比高く（＋）、降水量は平年並か少なく、日照時間は平年並か多いと予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- （１）成虫が最も好む時期は、莢の伸張後期から子実肥大中期で、その時期が過ぎると、より好適な食草、越冬場所を求めて移動するが、幼虫はそのまま留まり、黄熟期まで加害し続ける。そのため、薬剤散布は着莢期から子実肥大中期まで１０日間隔で２～３回実施する。

詳細は、令和８年９月２５日付け「病虫害発生予察注意報第６号」
https://www.pref.kyoto.jp/byogai/documents/chuui2026_06.pdf
 を参照のこと。



※今後注意すべきその他の病虫害等は p. 9 を参照

チャ

１ チャノコカクモンハマキ

予報内容	発生量：山城	平年比やや多い（前年比やや多い）
	丹波	平年比やや多い（前年比やや多い）
	丹後	平年並（前年比少ない）

予報の根拠

- （１）９月中旬現在、発生量は山城及び丹波で平年比やや多く（＋）、丹後で発生を認めていない（平年並）。
- （２）フェロモントラップへの誘殺数は宇治市及び京丹後市で平年並、綾部市で平年比やや少ない（－）。
- （３）向こう１か月の気温は平年比高く（＋）、降水量は平年並か少なく、日照時間は平年並か多いと予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- （１）幼虫が、綴った葉の中で越冬して翌春の発生源となる。
- （２）ふ化した幼虫は葉を綴って食害するようになるため、薬剤がかかりにくいので注意する。
- （３）ジアミド系及び IGR 剤などの薬剤の効果が低下している地域があるので、これらの薬剤の効果が低いと感じられる場合は、同系統薬剤の連用を避ける。

詳細は、令和８年７月３０日付け「病虫害発生予察注意報第４号」を参照。

https://www.pref.kyoto.jp/byogai/documents/chuui2026_04.pdf



２ チャノホソガ

予報内容	発生量：山城	平年比やや多い（前年比多い）
	丹波	平年並（前年比やや多い）
	丹後	平年並（前年並）

予報の根拠

- （１）９月中旬現在、発生量は山城で平年比やや多い（＋）、丹波及び丹後で発生を認めていない（平年並）。

- (2) フェロモントラップへの誘殺数は宇治市、綾部市及び京丹後市で平年比やや少ない(－)。
- (3) 向こう1か月の気温は平年比高く(+)、降水量は平年並か少なく、日照時間は平年並か多いと予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 特に、自然仕立て園では園をよく見回り、発生を認めたら直ちに防除し、越冬密度を下げるようにする。

3 カンザワハダニ

予報内容	発生量：山城	平年比やや多い(前年比やや多い)
	丹波	平年比やや多い(前年比多い)
	丹後	平年並(前年並)

予報の根拠

- (1) 9月中旬現在、発生量は山城で平年並、丹波で平年比やや多い(+)、丹後で平年比やや少ない(－)。
- (2) 向こう1か月の気温は平年比高く(+)、降水量は平年並か少なく、日照時間は平年並か多いと予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 気温が低下するとすそ葉に移動して越冬し、翌春の発生源となる。
- (2) 翌春の一番茶期の発生を抑えるには、越冬前の防除が有効である。11月中に防除する。

※今後注意すべきその他の病虫害等はp.9を参照

野菜

1 アブラナ科野菜 ベと病

予報内容	発生量：平年比やや多い(前年比多い)
------	--------------------

予報の根拠

- (1) 9月中旬現在、キャベツでは発生を認めず(平年並)、カブでの発生量は平年比多い(+)。
- (2) 向こう1か月の気温は平年比高く、降水量は平年並か少なく、日照時間は平年並か多いと予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) キャベツをはじめ、ハクサイ、ダイコンなどの各種アブラナ科野菜で発生し、アブラナ科野菜を連作した場合に発生が多くなる。
- (2) 気温が低く降雨が続く秋から初冬及び春先に発生が多い。
- (3) 肥切れすると発生しやすいので、肥培管理に注意する。

2 アブラナ科野菜 白斑病

予報内容	発生量：平年並(前年並)
------	--------------

予報の根拠

- (1) 9月中旬現在、カブで発生を認めていない(平年並)。
- (2) 向こう1か月の気温は平年比高く、降水量は平年並か少なく、日照時間は平年並か多いと予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 雨の多い年は、初秋から晩秋にかけて発生が多い。
- (2) 強風雨や泥のはね上げは、本病の伝染、まん延を助長する。
- (3) 肥切れすると発病を助長するので、追肥を早めに行う。
- (4) 多湿条件で発生しやすいので、ほ場の排水を良好にする。

3 キャベツ 菌核病

予報内容 発生量：平年並（前年並）

予報の根拠

- （１）本年４月に発生を認めていない（平年並）。
- （２）向こう１か月の気温は平年比高く、降水量は平年並か少なく、日照時間は平年並か多いと予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- （１）発生終期に菌核が形成され、土中に落ち、次作以降の伝染源となる。菌核は土壌中で２～３年間生存する。
- （２）適温は２０℃前後で、曇雨天が続いた時に発生しやすくなる。
- （３）発病株は菌核を形成するまでに抜き取り、処分する。

4 アブラナ科野菜 黒腐病・黒斑細菌病

予報内容 発生量：平年比やや多い（前年並）

予報の根拠

- （１）９月中旬現在、キャベツでの黒腐病の発生量は平年比多く（＋）、ダイコンでは黒斑細菌病の発生を認めていない（平年並）。
- （２）向こう１か月の気温は平年比高く、降水量は平年並か少なく、日照時間は平年並か多いと予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- （１）害虫の食痕や風雨による傷口等は細菌の侵入を容易にし、発生を助長する。
- （２）降雨日数と発生量との相関が高い。
- （３）台風等による強い降雨の後や害虫の食害が目立つ場合は、早期防除に努める。

5 アブラナ科野菜 コナガ

予報内容 発生量：平年比やや少ない（前年比少ない）

予報の根拠

- （１）９月中旬現在、キャベツ、ダイコン及びカブで発生を認めていない（平年並）。
- （２）９月第２半旬現在、京田辺市、亀岡市及び京丹後市で予察灯（６０Ｗ）への誘殺は認めていない（京田辺市及び京丹後市：平年並、亀岡市：平年比やや少ない（－））。
- （３）９月第２半旬現在、京田辺市、亀岡市及び京丹後市でフェロモントラップへの誘殺を認めていない（京田辺市：平年並、亀岡市：平年比少、京丹後市：例年比やや少ない（－））。
- （４）向こう１か月の気温は平年比高く（＋）、降水量は平年並か少なく、日照時間は平年並か多いと予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- （１）防虫ネット等を利用し、物理的防除に努める。
- （２）発生回数が多く（１０～１２回／年）、各発育段階（卵、幼虫、蛹、成虫）が同時期に混在する。

6 野菜類全般 ハスモンヨトウ

予報内容 発生量：平年比やや多い（前年並）

予報の根拠

- （１）９月中旬現在、キュウリ、ダイコン及びナスでは発生を認めず（平年並）、キャベツでの発生量は平年比やや多い（＋）。
- （２）９月中旬現在、豆類での発生量は黒大豆で平年比やや多く（＋）、アズキでは平年並。

- (3) 9月第2半旬現在、フェロモントラップへの誘殺数は、京田辺市で平年比少なく、亀岡市及び京丹後市で平年比やや少ない(－)。
- (4) 向こう1か月の気温は平年比高く(+)、降水量は平年並か少なく、日照時間は平年並か多いと予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 齢が進んだ幼虫は周囲に分散し、かつ、薬剤の効果が著しく低下するので、若齢幼虫期の防除が重要である。

7 ホウレンソウ シロオビノメイガ

予報内容 発生量：平年比やや多い(前年並)

予報の根拠

- (1) 9月第2半旬現在、予察灯(60W)への誘殺数は京田辺市及び京丹後市で平年比やや多く(+)、亀岡市で平年並。
- (2) 向こう1か月の気温は平年比高く(+)、降水量は平年並か少なく、日照時間は平年並か多いと予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 秋期の気温が高く、雨が少ないと発生が多くなる。特に、雨よけ栽培の場合、降雨に関係なく急速に増殖することがある。
- (2) 早期発見に努め、若齢幼虫期の防除に留意する。

8 ネギ ネギハモグリバエ

予報内容 発生量：平年並(前年比やや多い)

予報の根拠

- (1) 9月中旬現在、小株で発生を認めず(平年比やや少ない(－))、大株での発生量は平年並。
- (2) 向こう1か月の気温は平年比高く(+)、降水量は平年並か少なく、日照時間は平年並か多いと予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 幼虫が葉肉部分を加害し、白い筋状の食害痕を残す。
- (2) 被害葉及び収穫残さが発生源となるので、残さは一箇所にまとめて積み上げ、表面をビニルで被覆する等適切に処分する。
- (3) 1葉あたり1～数匹の幼虫が加害するバイオタイプA(従来系統)とは異なり、10匹以上の幼虫で集中的に加害し、葉を白化させるバイオタイプB(別系統)の発生を確認しているので注意する。

詳細は下記の資料を参照。

技術資料「ネギハモグリバエ防除マニュアル(2025年)」

https://www.pref.kyoto.jp/byogai/documents/negihamoguribae-manual_202502.pdf



9 野菜類全般 ハモグリバエ類

予報内容 発生量：平年並(前年比やや多い)

予報の根拠

- (1) 9月中旬現在、キュウリ及びカブで発生を認めず(平年並)、ナスでの発生量は平年比やや少ない(－)。
- (2) 向こう1か月の気温は平年比高く(+)、降水量は平年並か少なく、日照時間は平年並か多いと予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) シュンギク、コマツナ等軟弱野菜は、被覆資材を用いた物理的防除に努める。
- (2) 幼虫は葉の中に潜り込み食害するが、その期間は3日程度と非常に短いので、薬剤を散布する場合は、発生確認後速やかに行い防除時期を逸しないようにする。

(3) 施設マルチ栽培では、マルチ上に落ちた蛹を掃き集めて処分する。

10 ネギ ネギアザミウマ

予報内容 発生量： 平年比多い（前年比やや多い）

予報の根拠

- (1) 9月中旬現在、発生量は小株、大株とも平年比多い（+）。
- (2) 向こう1か月の気温は平年比高く（+）、降水量は平年並か少なく、日照時間は平年並か多いと予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) ネギアザミウマは、年間10世代以上くり返し、葉の表層を食害し、かすり状の食害痕を残す。ネギでは葉鞘分岐部や葉折れの内側に多く寄生する。
- (2) 本種は、ネギえそ条斑病の原因となるアイリス黄斑ウイルス（Iris yellow spot virus：IYSV）を媒介する。
- (3) 薬剤散布の他、赤色系防虫ネットやUVカットフィルムによる物理的防除が効果的である。
- (4) 被害葉及び収穫残さが本虫の発生源となるので、残さは一箇所にまとめて積み上げ、表面をビニルで被覆する等適切に処分する。
- (5) 殺虫剤散布後は効果を十分に確認し、感受性の低下が疑われる場合は系統の異なる薬剤をローテーション散布する。

詳細は下記の資料を参照。

技術資料「ネギアザミウマに対する薬剤殺虫効果（2021年）」

<https://www.pref.kyoto.jp/byogai/documents/negiazamiukanjyusei2021.pdf>

技術資料「ネギえそ条斑病防除マニュアル」

https://www.pref.kyoto.jp/byogai/documents/negi_iysv-manual_20200124-forhp.pdf

技術資料「ネギ栽培における赤色系防虫ネット技術マニュアル」

https://www.pref.kyoto.jp/byogai/documents/negi_redcolor-net_manual.pdf



11 野菜類全般 シロイチモジヨトウ

予報内容 発生量： 平年比多い（前年並）

予報の根拠

- (1) 9月中旬現在、発生量はネギの小株で平年並、大株では例年比やや多い（+）。
- (2) 9月第2半旬現在、フェロモントラップへの誘殺数は京田辺市及び亀岡市で例年比多く、京丹後市で例年比やや多い（+）。
- (3) 向こう1か月の気温は平年比高く（+）、降水量は平年並か少なく、日照時間は平年並か多いと予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 本種は齢が進むと、薬剤の効力が低下するので、ほ場をこまめに観察して早期発見に努め、若齢期の防除を徹底する。
- (2) 被害葉及び収穫残さが本種の発生源となるので、残さは一箇所にまとめて積み上げ、表面をビニルで被覆する等適切に処分する。
- (3) 本種は寄主範囲が広く、ネギ以外に豆類、野菜類、花き類を加害するので注意する。

詳細は下記の資料を参照。

技術資料「シロイチモジヨトウ防除における化学農薬使用回数の削減マニュアル（2025年）」。

https://www.pref.kyoto.jp/byogai/documents/shiroichimojiyotou-manual_202502.pdf

令和8年7月23日付け「病害虫発生予察注意報第3号」

https://www.pref.kyoto.jp/byogai/documents/chuui2026_03.pdf

を参照のこと。



12 野菜類全般 タバコガ類 [オオタバコガ、タバコガ]

予報内容 発生量： 平年並

予報の根拠

- (1) 9月中旬現在、発生量はアズキで平年比やや少ない(－)。
- (2) 9月第2半旬現在、オオタバコガのフェロモントラップへの誘殺数は、京田辺市で平年比やや多く(+)、亀岡市で平年比やや少なく(－)、京丹後市で例年並。
- (3) 9月第2半旬現在、タバコガのフェロモントラップへの誘殺数は、京田辺市で平年並、亀岡市で平年比少なく(－)、京丹後市で例年比多い(+)。
- (4) 向こう1か月の気温は平年比高く(+)、降水量は平年並か少なく、日照時間は平年並か多いと予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 幼虫が食入しているトマト、ナス、トウガラシ等の果実は処分する。
- (2) 幼虫が果実等に食入したり、また幼虫の齢が進むと防除効果が低下するので、早期発見に努め、食入前及び若齢期に防除する。
- (3) オオタバコガはナス科、マメ類、アブラナ科野菜等広範囲の野菜、タバコガはナス科野菜を主に加害するとされている。

13 アブラナ科野菜 ハイマダラノメイガ [ダイコンシンクイムシ]

予報内容 発生量： 平年比多い(前年比多い)

予報の根拠

- (1) 9月中旬現在、発生量はダイコンで平年比多い(+)。
- (2) 向こう1か月の気温は平年比高く(+)、降水量は平年並か少なく、日照時間は平年並か多いと予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 生育初期に加害されると欠株等が生じ、大きな被害になるので注意する。
- (2) 株の生長点部を食害するため、被害株は生育が停止し、枯死する場合がある。
- (3) は種直後から防虫ネット等で被覆を行い、産卵を防ぐ。
- (4) ほ場を見回り、生長点付近の発生に特に注意して観察し、発生を認めた場合は、直ちに防除する。

※今後注意すべきその他の病害虫等は p. 9 を参照

今後注意すべきその他の病害虫等

発生量を予報していない病害虫について、発生生態及び防除上注意すべき事項を掲載しています。

アズキ

1 子実害虫類 (アズキノメイガ、マメノメイガ、サヤムシガ類など)

子実害虫類は、幼虫が莢や莢内に食入すると、防除効果が劣るので、幼虫ふ化時期～食入開始時期の防除が重要である。

2 オオタバコガ

本種は、葉だけでなく子実も加害する。登録薬剤には、ピリダリル剤(プレオフロアブル)やB T剤(サブリーナフロアブル、チューンアップ顆粒水和剤、デルフィン顆粒水和剤等)がある。

果樹

1 黒斑病（二十世紀ナシ）

- （１）収穫期に降雨が多い年は、袋掛けした果実でも、袋の口から雨水とともに分生子が流れ込み、発病することがある。
- （２）夏から秋に掛けての葉での発生は、枝病斑や短果枝の病芽の発生を招き、翌年の感染源となる。落葉した発病葉も翌年の感染源になる。越冬感染源を減らすことで、翌年の発病を少なくすることができる。
- （３）窒素過多になると黒斑病が発病しやすいので、多発園では施肥量に注意する。

2 黒星病

- （１）秋型病斑は葉裏全面に発生し、春季とは様相が異なる。
- （２）晩冬には、落葉した被害葉の裏面上には偽子のう殻が形成される。翌春、ここから子のう胞子が飛散し、これも感染源となるため、集めて適切に処分する。
- （３）秋期防除は、翌年の芽のりん片への感染を予防するために行う。この防除は降雨前に行うことを心がけ、薬剤が棚上の徒長枝や新梢を流れ落ちるように、充分量散布することが重要である。

3 果樹カメムシ類

- （１）カメムシ類は、夜温が高く風の弱い日の日没頃に多く飛来する。
- （２）合成ピレスロイド剤の連用は、ハダニ類やカイガラムシ類が多発する恐れがあるので避けること。
- （３）薬剤防除に当たっては収穫前日数等、薬剤の使用時期に十分注意する。

チャ

1 チャトゲコナジラミ

本種の農薬による防除適期は若齢幼虫期である。成虫発生期の散布では密度抑制効果が不十分であるため、成虫の飛翔が落ち着いた頃を見計らって薬剤散布を行う。

野菜

1 軟腐病（キャベツ、ハクサイ、カブなど）

ほ場の排水に努め、雨水が停滞しないようにする。施肥は、窒素過多にならないよう注意する。

台風等の風雨による傷や泥のはね上げにより発病が助長される。また、キスジノミハムシ、コオロギ等食葉性害虫の食害痕から細菌が侵入して発病することが多いので、強い降雨の後や害虫の被害が目立つ場合は、早期防除に努める。

2 ネギベと病

10月以降、平均気温が10～20℃で降雨が多くなると、ほ場にすき込まれた罹病残さ等に潜伏している病原菌（卵胞子）の活動が活発となるので、本病の発生には十分注意する。

3 キュウリ退緑黄化病、キュウリ黄化病、キュウリ黄化えそ病、CABYV

いずれもウイルスによる病害で、退緑黄化病及び黄化病では葉に退緑及び黄化症状を示して減収し、黄化えそ病では葉にモザイク、えそ斑点及び黄化等の症状を、果実にモザイク斑紋や奇形を生じて減収し、CABYV（和名未定）では中位葉の半分程度に退緑及び黄化症状が発生して減収する。いずれもキュウリ以外のウリ科作物でも発生する。媒介は、退緑黄化病ではタバココナジラミにより、黄化病ではオンシツコナジラミにより、黄化えそ病ではミナミキイロアザミウマによる。CABYVの媒介虫は不明であるが、海外ではアブラムシ類とされている。

詳細は下記の特殊報を参照。

キュウリ退緑黄化病

令和5年12月26日付け「発生予察特殊報第2号」。

https://www.pref.kyoto.jp/byogai/documents/tokusyu2023_02.pdf



キュウリ黄化病

令和6年4月24日付け「発生予察特殊報第2号」。

https://www.pref.kyoto.jp/byogai/documents/tokusyu2024_02.pdf



キュウリ黄化えそ病

令和6年9月4日付け「発生予察特殊報第4号」。

https://www.pref.kyoto.jp/byogai/documents/tokusyu2024_04.pdf



CABYV

令和6年2月1日付け「発生予察特殊報第1号」。

https://www.pref.kyoto.jp/byogai/documents/tokusyu2024_01.pdf



4 トマト黄化葉巻病及びトマト黄化病

トマト黄化葉巻病は、黄化葉巻ウイルス（TYLCV: Tomato Yellow Leaf Curl Virus）の感染により引き起こされる病気で、症状は、先端部の葉が内側に巻く、葉縁が黄化、株の萎縮等で、タバココナジラミによって媒介される。

トマト黄化病は、葉の一部の葉脈間が退緑及び黄化し、生理障害の苦土（マグネシウム）欠乏の症状に類似し、タバココナジラミ及びオンシツコナジラミによって媒介される。

詳細は令和3年8月6日付け「発生予察特殊報第1号」を参照。

https://www.pref.kyoto.jp/byogai/documents/tokusyu2021_01.pdf



5 タバココナジラミ

世界中に分布し、多くのバイオタイプが存在する。中でもバイオタイプQは薬剤感受性が低く難防除害虫であるので、防虫ネットや黄色粘着板及び農薬等を組み合わせた「総合的害虫管理」が有効となる。

詳細は、技術資料「施設トマトにおけるタバココナジラミ防除マニュアル（2025年）」

https://www.pref.kyoto.jp/byogai/documents/tobacowhitefly-manual_202502.pdf



参 考

I 近畿地方の気象の1か月予報

(9月19日から10月11日までの天候見通し)

令和8年9月17日
大阪管区気象台発表

＜予想される向こう1か月の天候＞

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

暖かい空気に覆われやすいため、向こう1か月の気温は高いでしょう。高気圧に覆われやすいため、向こう1か月の降水量は平年並か少なく、日照時間は平年並か多いでしょう。

＜向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率(%)＞

	低い(少ない)	平年並	高い(多い)
気 温	1 0	3 0	6 0
降 水 量	4 0	4 0	2 0
日 照 時 間	2 0	4 0	4 0

病虫害防除所では上記の天候の1か月予報の表現を「向こう1か月の気温は平年比高く、降水量は平年並か少なく、日照時間は平年並か多いと予想されている。」としました。

II 用語の定義

1 半旬のとり方

第1半旬 第2半旬 第3半旬 第4半旬 第5半旬 第6半旬
各月の 1～5日 6～10日 11～15日 16～20日 21～25日 26～最終日

2 発生量――病虫害の発生程度と広がり両面を加味したものをいう。

3 平年値――原則として過去10か年の平均とする。
データが10年に満たない場合は例年値とする。

4 平年値との比較

1) 時期

平年並	平年値を中心として前後2日以内
やや早い	平年値より3～5日早い
やや遅い	平年値より3～5日遅い
早い	平年値より6日以上早い
遅い	平年値より6日以上遅い

2) 量(発生量、発生面積等)

平年並	平年値並の発生で10年間に4回は発生する程度の普通の量
やや多い	「平年並」より発生が多く、10年間に2回程度の頻度で発生する量
やや少ない	「平年並」より発生が少なく、10年間に2回程度の頻度で発生する量
多い	「やや多い」より多く、10年間に1回程度しか発生しない量
少ない	「やや少ない」より少なく、10年間に1回程度しか発生しない量

※病虫害防除については、病虫害防除所・最寄りの農業改良普及センター又は農協にご相談ください。

詳しい農薬情報は、農林水産省ホームページの「農薬コーナー」の「農薬情報」をご覧ください。

ホームページアドレス http://www.maff.go.jp/j/nouyaku/n_info/index.html

農業改良普及センター		電話番号一覧
・京都乙訓	農業改良普及センター	075-315-2906
・山城北	農業改良普及センター	0774-62-8686
・山城南	農業改良普及センター	0774-72-0237
・南丹	農業改良普及センター	0771-62-0665
・中丹東	農業改良普及センター	0773-42-2255
・中丹西	農業改良普及センター	0773-22-4901
・丹後	農業改良普及センター	0772-62-4308

京都府病虫害防除所

〒621-0806 京都府亀岡市余部町和久成9

TEL 0771-23-9512

FAX 0771-23-6539

－農薬の使用にあたっては使用基準を遵守すること－